

『番組制作と探検部』

自分の立ち位置を知れ

38代 OB 香川史郎

今、僕は、NHK で自然番組を制作している。

これは、テレビ番組の業界に入ってから足かけ10年、この夏かなったばかりの夢である。番組のノウハウをできる限り吸収しながら、次の夢に向かって走り出している。

将来の夢、それは、自然番組の制作プロ

くれる場所だった。

僕自身は、ロッククライミング、川下り、洞窟潜りなどの技術にたけていたわけでもなく、はたまた、アムンゼンや植村直己のような鋭い観察眼や知恵があるわけでもなかった。あるのは、「体力」だけだった。

「オマエ、脳ミソまで筋肉とちやうか？」とタクラマカン砂漠を歩いている時に言ったのは松原先輩だった。なるほどその通りだった。「自分の取り柄は、体力があることだけ」。

実際、そうだったから、悔しいけど認めざるを得なかった。でも、それを自認することで、タクラマカン砂漠踏破遠征とマダガスカル樹上探検成功の一助を担えたような気がしている。



最初の海外遠征は、タクラマカン砂漠、1995年のこと

ダクションを作ること。かなうまでに、一体何年かかるだろうか。

「夢」。それはかなわないものではなく、かなえるためにあるものだと思はれる。僕にとって「探検部」は、「夢」をかなえる喜びを教えて

今思えば、僕は、探検生活を通して、「自分の立ち位置」を見極める目線を持つことができるようになったことが、一番の収穫だったようにも思う。立ち位置を知ることは、自分の能力を知ること。だからこそ、目標は能力の

限界を敢えたところに設定するし、ひいては、それを超えたいというエネルギーが湧いてくる。

大学卒業後、僕はその時々を夢をかなえるために、常にそう思って生きてきた。

何らかの「気づき」を得るためには、信頼できる仲間が欠かせない。部員、OBの皆さんとの出会いもさることながら、タクラマカン、マダガスカルをともに過ごした仲間との運命的な出会いは、僕にとって今でもかけがえのない宝だ。

共に笑い、共に苦しみ、共に涙する中で、それぞれがそれぞれの役割を知り「自分の立ち位置」を認められるようになったのだと思う。もし仮に、探検部に違った人たちがいたならば、そこで引き起こされる人間関係が変わるため、少なくとも今の僕はいないだろう。そういう意味で、皆に出会えたという運命にはいつも感謝している。

思えば、僕は子どもの頃、田んぼで泳いで遊んでいた。ただ、泥のにゆるにゆるした感触と土の香りが何ともいえず、好きだった。近所ではちょっと有名な変人で、皆に白い目で見られていたことは、子どもながらに感じてはいたけど、この時も人の目を気にせず共に遊ぶ幼なじみがいた。幼なじみの笑顔は、田んぼの土のにおいと共に記憶にしっかりと刻まれている。この時の楽しい思い出が、僕を自然好きにし、大学で探検部に入るきっかけになった。そして、今、やはり自然と向き合う番組を作っている。これを運命と言わずして、なんと云えばいいのだろうか？偶然の出会いとそこでの経験が僕に夢を与え、その夢をかなえさせてくれている。中でも、探検部は、夢をかなえるために最も大切な「己の立ち位置を知る」という教訓を与えてくれた場所。今、幸せに生きているのは、探検部の皆さんと出会えたから。ありがたい。



右が香川。マダガスカル隊は卒業後の参加。撮影の勉強のため制作会社に勤めた。その映像記録は高い評価を受け、TBS『報道特集』で放送された

さて、もうひとつ、皆さんに伝えたいことがある。自分たちなりの目線で、探検に望んでほしいということ。

まずは自分が本当にやりたい探検は何なのか、自由に発想してください。馬鹿馬鹿しくて大いに結構。でも、一度やると決めたら、その計画に真剣に向き合うことが大切です。そうすれば、様々なことが見えてくるので、どんどん

面白いと思う方へ計画を変えていけばいい。気がつくと、計画はオリジナリティに溢れた面白い中身になっているはずだ。

実は、マダガスカル樹上探検は、当初は全く違う遠征計画から始まったものだった。皆さんには信じられないかもしれないけど、なんと、それは、大学のグラウンドからボルネオ島(マレーシア)まで手作りの「足こぎ飛行船」で飛んでいくというもの。「目立って大学の女の子に注目されたい」という卑しい気持ちが少しはあったのも確かだが、真剣に取り組んだ。結局、飛行に必要なヘリウムガスがとてつもなく高価だったため、断念。

計画は、マダガスカル樹上探検へと変わっていった。プロジェクト内容が決まるまでの半年間の紆余曲折の中で、メンバーが常に合い言葉にしていたのが、「誰もやっていないことをやろう」だった。

一生懸命に、「新たな視点獲得」のための努力は、今の仕事にも生きている。

生きものの生態は、わかっているようでわかっていないことがとても多い。僕たちが知っているのは生きもののほんの一部の情報でしかない。でも、テレビで流れている生きものの番組は、ほとんどがどこかで聞いたようなものばかり。NHKでも「生きもの地球紀行」や「地球ふしぎ大自然」など、長年生きもの番組を放送し続けてきたが、視聴率は頭打ち。



学生時代は、「陸軍歩兵軍曹」とあだ名された体力派。今は頭を使っています

そこで、新番組を立ち上げた。「ダーウィンが来た！生きもの新伝説」だ。去年から始まった番組で、今まで見られていなかった若い女性や子ども達に好評を博している。(視聴率は、なんと倍以上にあがった！)

この番組のコンセプトは、今まで知っていたように思う事実を違った視点で見つめ、最新鋭の特殊機材で撮影する、というもの。視聴率がすべてではないが、視聴率があがっているということは、番組が新鮮だからなんだと思う。僕は、この夏、東京に転勤し、早速1本作ったのだが、制作は面白くて面白くて！「視点を変えて見る」ということが、いかに刺激的なことであるかを再認識した瞬間だった。

深海と地底以外、地図上の空白地はもはやないので、探検部の存在意義が揺らいでいる、とも言われているが、僕はそうは思わない。

特集 OBからのメッセージ

今だからこそ、発想を転換し、新たな視点で勝負する探検新時代を迎えているんだと思う。人間がこの世にいるかぎり、未知への知的好奇心は尽きることは絶対でない。

関西大学探検部から、刺激的なプロジェクトが生まれることを楽しみにしています。仲間と共に、愚直に、一生懸命考えてください。社会に出たときに必ず、その経験は生きてきます。

さて、今から僕も次の「ダーウィンが来た！」のテーマ、イベリアオオカミの何に驚いてもらえるか、考えるとしよう。

2007年9月29日

(38代OB)

1年をかけて清流古座川の四季を鮎の目線で追った。NHK 和歌山時代

